

Changes in metamorphopsia after the treat-and-extend regimen of anti-VEGF therapy for macular edema associated with branch retinal vein occlusion

森, 賢一郎

<https://hdl.handle.net/2324/4784501>

出版情報 : 九州大学, 2021, 博士 (医学), 課程博士
バージョン :

権利関係 : (c) 2020 Mori et al. This is an open access article distributed under the terms of the Creative Commons Attribution License.



(別紙様式2)

氏 名	森 賢一郎			
論 文 名	Changes in metamorphopsia after the treat-and-extend regimen of anti-VEGF therapy for macular edema associated with branch retinal vein occlusion			
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	吉本 幸司
	副 査	九州大学	教授	磯部 紀子
	副 査	九州大学	教授	三浦 岳

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

網膜静脈分枝閉塞症(BRVO)は、最も一般的な網膜血管疾患の一つである。BRVOに続発する黄斑浮腫は主な合併症であり、視力を低下させる。治療には抗血管新生阻害薬を用いるが、視力が改善しても歪視が改善しないことがある。申請者らはBRVOに続発する黄斑浮腫に対して、treat-and-extend(TAE)法を用いた抗VEGF療法後の歪視変化を調べることを目的として研究を行った。対象は2014年4月から2017年4月に九州大学眼科で黄斑浮腫を伴うBRVOと診断され抗VEGF療法をTAE法で行い、18ヶ月間以上経過を迫えた27例27眼である。診療録を用いた後ろ向き観察研究により、logMAR視力、中心窩網膜厚、黄斑浮腫の再発、M-CHARTSを用いた歪視量を評価した。解析結果からlogMAR視力および中心窩網膜厚は、治療前と比較して治療後18ヵ月では有意に改善していた。垂直と水平方向のM-CHARTSスコアの平均値は、治療前と比較して、1、6、12ヵ月後では有意に改善したが、18ヵ月後には悪化していた。単回帰分析および重回帰分析の結果、18ヵ月後のM-CHARTSスコアの平均値の変化は、治療前のM-CHARTSスコアの平均値および黄斑浮腫の累積再発回数と有意に相関していることを示した。以上の結果から、TAE法を用いた抗VEGF療法は、BRVOに伴う黄斑浮腫によって生じる歪視を、短期から中期では改善したが、長期では改善せず、黄斑浮腫の再発によって持続的な歪視を生じる可能性を明らかにした。

以上の成績はこの方面の研究の発展に重要な知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったが適切な回答を得た。なお本論文は共著者多数であるが、予備調査の結果、申請者が主導的役割を果たしていることを確認した。

よって調査委員合議の結果、試験は合格と決定し、博士(医学)の学位に値すると認める。